市川のまち 地名の由来

《No.6》

押切

江戸川が2つに分かれるところ

火山爆発による溶岩によってつくり出された地形を、「オシダシ」といいます。この地形の典型例としてよく知られているのが、浅間山の「鬼押出し」です。また、河川がつくり出した扇状地も、「オシダシ」とか「オシデ（押出）」などと呼ばれています。これに対して、大きな河川が本流から分かれて流れるところを、「オシキリ（押切）」といいます。つまり、土地を高く積みあげることが「押出し」で、分断することが「押切」なのです。

本市の「押切」には、現在の行徳駅前通りに、旧江戸川から東京湾に抜ける一条の水路がありました。これは、まさに、江戸川がここで二つに分かれたことを示すもので、「押切」の地名の起こりだと思われます。

しかし、これとは別に、次のような話も伝えられています。それは、今から五百年ほど前の戦国時代に入ったころのことです。鎌田村（現在の江戸川区江戸川・篠崎・瑞江の地域）の住民たちが、まだ干潟であったこの土地を埋め立てて開墾し、「鎌田新田」と呼びました。そして、この地が鎌田村から江戸川を越えて開墾された所、即ち江戸川を押し切ってつくった新天地であるということで、「押切」の名に変わったというのです。

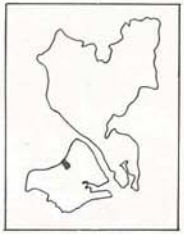
この押切村の鎮守となったのは、現在の稲荷神社です。この神社には、観音様が祀（まつ）られていますが、この観音像は建久八年（一一九七）、京都三条の仏師の祖といわれる鎌足義政が、大和国（現在の奈良県）長谷寺の十一面観世音菩薩像を模して、全長一尺二寸五分（約三八㌢）の大きさに作ったものです。それが、巡り巡って、鎌田村に祀られ、押切の開発に伴って、この鎮守の御本尊となったのです。

しかし、江戸時代はじめに起きた津波のため本殿が破壊されたとき、この観世音菩薩像は、鎌田村の長寿院に預けられました。それから、およそ二百八十年後の大正二年に至って、新井庄右衛門、川崎佐次右衛門、及川喜太郎らが、押切の総代として長寿院に御本尊の返還を要求しました。鎌田村ではさっそく村議を開き、この返還要求を受け入れました。そこで、この年の十二月十九日、早朝から神楽を奏し、総代、氏子一同が舟でお迎えして、御本尊は無事に本殿に納められたといいます。

この本殿の彫刻は、実に見事な出来映えで、末永く残したいものです。本年三月、火災がありましたが、ボヤで済んだことは、不幸中の幸いでした。

（社会教育指導員・綿貫喜郎）

◇

次回は「真間」を予定しています。

押切稲荷神社の本殿